

# 『一塊の土』論

## — 家族論の視点から

樂 殿 武

### 始めに

芥川の『一塊の土』は大正十二年に書かれ、十三年一月に『新潮』に発表されたものである。この作品は当時の農村を題材にし、農家の二人の女性——お住（姑）とお民（嫁）を描き、特に平凡な農婦お民の運命を一塊の土に喩えて描いたと考えられる。当初からこの作品は、芥川の中で異色の存在として注目され、特に特異な素材と写実的手法の二つの特徴で評価された。

発表当時、まず生田長江と渡辺清は、新聞の文芸欄で好意的な感想を述べた。<sup>(1)</sup> また正宗白鳥は、「熟読した。そして、感歎措く能はざるものがあった。私の読んだ新年の数編の創作中では、これが最大の傑作である。芥川君の作中でも、これほど、力の籠った、無駄のない気取り気のない、奇想や美辞を弄した跡のない小説を私は一度も読んだことがない」〔郷里にて〕『文藝春秋』大正十三年二月と、高く評価する。白鳥の絶賛に対して芥川は、「十年前夏目先生に褒められた時以来最も嬉しく感じました」と、書簡（大正十三年二月十二日）の中で喜びの気持ち

ちを述べている。片岡鉄兵は「『一塊の土』は或る意味で写実の極致であらう。一人の女の運命が、一塊の土と朽ち果てる運命が、恐しいほど冷やかに客観され、必然を追って描破されて居る」〔作家としての芥川氏〕『文藝春秋 芥川龍之介追悼号』昭和二年と、写実の手法を評価している。白鳥はまた後に「芥川氏は、現代の写実に於いても、可成りに傑れた技倆を現はしてゐる。（中略）ことに『一塊の土』はいゝ。『地獄変』と相並んで、この作者の全作中で、最高位に立つものである」〔作家論Ⅱ』創元社、昭和十七年）と、片岡と同じ見解を表明している。同時代評の中には、右のような賛辞のほか、『一塊の土』に対する不満がなかったわけではないが、全体的に見ると評価が高かったと言える。このような初期の評価に対して、吉田精一氏は「書齋の空想では手の及ばぬ、知識層以外の現実生活に彼の鋤を入れた最初の作」と一応評価した上で、「観念が先立っている為に人間が死んでゐる趣がある」〔芥川龍之介』新潮社、昭和三十三年一月）と指摘している。また吉田精一氏は、片岡鉄兵の「作者はまざまざと一塊の土をさし示すのみ。そして口を噤む。つまり作者は何を主張もしない、要求もしな

い」という観点を批判し、「作者は何も主張しないわけではない。『彼等親子三人とも悉く情ない人間だった』という人間観、そして貞女といわれ、働き者といわれる嫁が、むしろ姑に不孝な、一種のエゴイスト、もしくはエゴチストであり、その家庭の内部に立入って見ると、姑と嫁とのエゴイズムの角突き合いだったというのが、この作の中心的なテーマであった」（『芥川龍之介の作品解説』吉田精一著作集②『芥川龍之介』所収、桜楓社、昭和五十六年十一月）とも述べている。

三好行雄氏は『一塊の土』の主題について、次のような卓見を示している。

龍之介の筆は農家の生活（の細部）を、それなりのリアリティとともに描きだしている。小説の最終章で、お住をおそう孤独な情けなさも、人間存在のかかえこむ業の哀れを彷彿してみごとである。

（中略）／見たものを告げる冷徹な語りくちが、小説内のヴェクトルにうながされて批判にまで踏み出そうとする一瞬、いわば認識が告発に転じる間髪ひまに、認識を唐突に遮断する抒情とともに現われる鮮明な風景——このきわだって龍之介的な収束のしかたとあわせて、『一塊の土』は龍之介の主題と方法をまだ裏切っていない。／しかし、問題はまさしく、そこにある。老いた農婦の情なさか人間の宿業にまで普遍化されたとき、ことばを変えていえば、仁太郎の死による解放と、お民の死によるそれとの決定的な異質をひとつにつつんで、お住の肉体的な、余りにも肉体的な嘆きによって円環を閉じたとき、『一塊の土』は、農民小説としての固有の条

件と実質を喪失した。

（『ちくま』昭和五十一年十月号）

三好氏の論は正宗白鳥らの写真手法に対する評価を越え、『一塊の土』と芥川文学の主題とのつながりを見事に見抜いている。

片岡良一氏は、お住を主人公とみなし、「人の死に解放の喜びを感じたかの女が最後にはそういう自分も自分の周囲の人間たちも、みな同じようにみじめなものでしかないことを感ずるようになっていくところに、主要なねらいのあった作品であることは明瞭ですし、そのお住の解放感をもこめて、虐げられたものすべてのみじめさをいおうとしているねらいには、さすがに「枯野抄」などから見ても一歩の前進が感じられるのも事実です」と評価しながらも、「当時とすれば珍しい題材であり、お民を押しつけている家の問題その他をこめて、いろいろな描きかたされるはずのものでありながら、作者はこうしてそこにべつだん新しいものを見ているのでもなく、新しい見方を獲得しているのでもなかったのです」（『芥川龍之介』片岡良一著作集第九卷『夏目漱石と芥川龍之介』所収、中央公論社、昭和五十五年二月）と、厳しく批判している。

このほか、吉村稠氏は、「芥川文学の展開は、エゴイズムとの対峙にその文芸世界の本質を構築していった。作品に描き出された人間像を中心にそれぞれの諸相が織りなすところに一つの軌跡を認めることができる。『一塊の土』は、そのような芥川文学の本質において、人間性の根源に宿っているものを、一人の女の宿命的な生き方の中に見出した作品であると言える」（『一塊の土』、『芥川文学の世界』所収、吉村稠・中谷克己、明治書院、昭和五十二年）と指摘している。また、石割透氏

は、「人間の死まで、対立・葛藤が解消されぬ、人間の内部に潜むどうしようもないエゴイズム、そうした関係にありながらも、対立が解消した後には孤独しかない哀しい人間の業、『彼等親子は三人とも悉く情ない人間』、『その中にたつた一人生恥を曝した彼女自身は最も情ない人間』とする作者の人間観には、自我の対立といった軽いことばでは表し得ぬ、人間存在の宿命にまで達した深い芥川の慟哭が聞き取れる」(石割透「『一塊の土』」、『芥川龍之介研究』所収、菊池弘ら編、明治書院、昭和五十六年)と述べている。吉村氏と石割氏の論は共に作品内部に潜む人間のエゴイズムの問題を論じ、基本的に吉田精一氏の論の延長線上にあると思われる。

関口安義氏は、「この作品は老女お住の苦悩が中心であり、一生を働きつづけて、あっけなく死んでいったお住という哀れな農村女性のあるがままの人生を描こうとした作品となっていない。お民の苦悩は、作品全体の中に十分有機的にくみこまれていないのである。そして、生きていく人間としての悩みを背負わされ、忍従の生活を余儀なくされているのは、元来肉体労働から遠い位置にいるお住なのだ。／＼作者は自己の悩みを、農村の一女性の立場を借りて語っているのである。それゆえお住やお民を押しつけていたはずの〈家〉の問題もはっきりと示されず、また、お民の死後には三千円もの貯金が残されていたということになり、働いても働いても楽にならないはずの農民の悲惨な現状が、どこかあいまいなものとなってしまうのである」(「孤独と宿命——『一塊の土』」『芥川龍之介 実像と虚像』所収、洋々社、昭和六十三年十一月)と、作者の視野の狭さを指摘している。関口氏の論は、作品の登場人物に芥

川の悩みが投影されるという従来の説を受けながら、『一塊の土』における社会性の欠如や家の問題に言及する点に新味が見られる。

平岡敏夫氏は、『芥川龍之介 抒情の美学』(大修館書店、昭和五十七年十一月)の中で従来のテーマ(エゴイズム論)と異なる立場をとり、新しいテーマとして「芥川は農民の生活、その一家を描いて、人生とは何か、幸福とは何かを新たに問おうとした」ことを発見し、各節の書き方の特徴を分析するテクスト論を展開しながら、『一塊の土』は、広い人生、実人生をとらえて、『斯様な生活をして居る人間が、我我と同時代に、しかも帝都を去る程遠からぬ田舎に住んで居るといふ悲惨な事実』を私たちに突きつける。「情ない人間」という芥川の間観、人生観をこめた『一塊の土』は、『己れの人格の上に暗い恐ろしい影を反射させる為だから我慢して読め』という師漱石の忠告に対する、芥川なりの答えであったというべきであろう」との結論を出している。

『一塊の土』は、このように従来、「女の幸福とはなにか」、「人間のエゴイズムとはなにか」といった観点からのみ論じられてきた。本稿は、今まで取り上げられることのなかった「家族論」の視点から、お民とお住の生き方を検証し、近代日本社会における家族意識、また「家」をめぐる共同体の社会通念の変化などの問題を考えてみたいと思う。

## 一

『一塊の土』のテーマがいったい何であるのかは、長い問論じられる対象であった。同時に、姑お住と嫁お民のどちらが主人公なのかという問題も、議論の焦点の一つであった。芥川は『一塊の土』において、お

住の日常的な悩みを中心に作品を構成しながら、一塊の土のように自然に戻ったお民の惨めな一生を書く手法を用いており、テーマや主人公に関する議論が繰り返される要因となっている。

まず、作者の与えた情報に従って、お民を中心に読んでみることにしよう。お民は、夫に先立たれた未亡人で、一家の稼ぎの中心でもある。同時に家と子供のために再婚を拒み続け、朝から晩まで外で働く「勤勉」な嫁である。また、彼女はいわゆる「渡りもの」の娘で、「彼女の心に深い根ざしを下ろしてゐた遺傳の力」がある。よって、彼女は宿命的な「稼ぎ病」に侵され、働くのを生き甲斐とする。お民は、表向きは働き者だが、炊事、洗濯などの一切の家事をすべて姑のお住に押しつける。彼女は未亡人でありながら、再婚もせず、勤勉に働くことで村の人々から「貞女の鑑」、「嫁の手柄」と賞賛される。しかし、姑のお住から見れば、楽にさせてもらえない、表裏のある憎らしい嫁である。彼女の「稼ぎ病」の結果として、三千円の大金が貯まったが、腸チフスの伝染によって彼女は頓死し、惨めな一生を終える。

本作を一読すると、お民の一生が中心になっているように見える。しかし、お民の人物像は決して鮮明とはいえない。何故ならば、この作品は、彼女の身辺生活を描いてはいるものの、彼女の精神世界については全くと言ってよいほど書いていないからである。母子家庭で老人と子供を抱え、苦しみや悩みを感じるはずの彼女は、それを一切現さず、楽しそうに働いている。魯迅の『明日』<sup>(註)</sup>に描かれた寡婦は、明日の生活への不安や現在の寂しさなどを抱えているが、お民にはそれが無い。彼女は田畑を守るため、息子のために生きており、その人生の軌跡は作品の筋

もしくは作品の外枠を構成するように思われる。ところが、労働が自己目的化し、<sup>(註)</sup>際限なく働く彼女は、お住の意志を無視し、家事をすべてお住に押しつけ、また、それに従わないお住に対し、「お前さん働くのが厭になつたら、死ぬより外はなえよ」という。この言葉から、彼女のエゴイズムが辛うじて読み取れるが、それ以外にお民の肉体的な感情はほとんど表面化しないと云ってよい。

一方、お住は家長でありながら、地位も権力も持っていない。寝たきりの息子仁太郎が病死した後、嫁に気兼ねをすると同時に、世間に対しても常に気兼ねし、苦勞して生きている。当初、お住は仁太郎の従弟と吉をお民の再婚相手に世話し、彼女を家に引き留めようとするが、お民は再婚を拒否する。お住の気持ちは、心配と嬉しさが入り交じった複雑なものである。お住がお民に再婚を勧めた理由は、子供が幼いため、お民に出て行かれると困るからであり、これからの生活を維持するために必要な労働力を確保したいからという単純なものである。しかし、そのような気持ちは次第に「親戚に叱られ、世間にはかげ口をきかれる」ことを気かけ、お民の若さでは男なしにはいられないと考えるなど、世間への配慮が強くなる。のちには、働き手が足りないことへの不満、またお民を主婦の地位に回復させ、自分が「留守居役の苦しみ」から逃れたいと思うなど、時間の経過につれて色々と変化していくが、一つだけ一貫していることがある。それはつまり、これらの理由の多くが表面上お民のために考えているように見えるが、実際には、お住自身の都合を最優先させていることである。

夫の死後、一家の大黒柱になったお民に対し、お住は家事を引き受け

ることでの感謝の気持ちを現す。それで、しばらくの間、二人の間には対立もなく、平和の暮らしが送られる。作品に次のような場面がある。

お民はかう云ふ間にも煙の出る藪を頬張りはじめた。それは一日の労働に疲れた農夫だけの知つてゐる食ひかただった。藪は竹串を抜かれる側から、一口にお民に頬張られて行つた。お住は小さい軀を立てる広次の重みを感じながら、せつせと藪を炙りつづけた。

「何しろお前のやうに働くんぢや、人一倍腹も減るらなあ。」

お住は時時嫁の顔へ感歎に満ちた目を注いだ。しかしお民は無言のまま、煤けた槽火の光の中にながつつ薩摩藪を頬張つてゐた。

(『芥川龍之介全集』第十卷 一九二頁 岩波書店 平成八年)

この場面を見ると、家庭におけるお住とお民の関係は、通常の姑と嫁のそれではなく、三好行雄氏の指摘したとおり、あたかも妻と夫のようである。

ところで、作者は、お住を専業主婦として位置づけているが、物語の時代背景として想定されている明治・大正時代の農村共同体に、作者のイメージしたような労働従事者と家事従事者の完全分業の生活スタイルは、果たして成立していたのだろうか。当時の農村社会についての諸研究を見ると、農繁期と農閑期の差がもちろん存在するが、作品に書いたような、仁太郎の死からお民の死までのほぼ八年間に完全分業するといふ構図は、農家の実生活に当てはまらないようである。

本作が現実の農村社会をどれほど写実的・具体的に反映しているのか、

あるいはいないのかといった問題は、すでに先行研究において論じられており、本稿ではこれ以上触れない。あくまでお住とお民の関係と家族意識を中心に論じていくことにする。

お民の人間的な感情が作品中に描かれぬのに対し、お住の気持ちは終始描かれている。お住は最初、お民と同様に、「家」存続のために田畑を残すという家共同体意識を共有し、積極的に協力するが、間もなくお民の自己目的化する労働に巻き込まれ、不満を抱きはじめる。労働及びそれによる事業の拡大に自己満足の充実を見出すお民と対照的に、芥川は、父親不在家庭の暮らしの苦しみを一身に背負い込み、その辛さに耐え続けるお住の内面を描いた。彼女の精神的辛さは人間の本音の部分であり、お民の自己満足に圧された結果であるが、お民の「家」存続のために田畑を残そうとする建前論に比べれば、お住の個人的な感情は、個人の犠牲を強いても「家」存続を最優先とする農村共同体の通念に一致しないため、共同体の中で他人の理解を得ることは難しい。ゆえに、お住は嫁に対する不満を胸にひそめ、一人で耐えるしかない。彼女は十二三才になったばかりの孫広次に、早くも将来の希望を託した。それだからこそ、孫の「おらのお母さんはうんと偉い人かい?」という問いに尋常ならぬ怒りを覚え、「お前のお母さんと云ふ人はな、外でばつか働くせゑに、人前は偉く好いけれどな、心はうんと悪な人だわ。おばあさんばつか追ひ廻してな、氣ばつか無暗と強くてな、……」と吐き出したのである。彼女の怒りは嫁に対するばかりでなく、社会の論理、お住の言葉で言えば「嘘の皮」の横行する世間に向けられ、また同時にこのような社会の論理を孫に教え込まれたことに対して我慢できなかったの

である。

しかし、作品の結びで一家の唯一の働き手であるお民の頓死がお住に幸せをもたらしたという結末は、主要登場人物が最後に死去するという、偶像破壊ともいべき芥川文学のテーマの延長線上にある。

（前略）彼女はもう働かずとも好かった。小言を云はれる心配もなかった。其処へ貯金は三千円もあり、畠は一町三段ばかりもあつた。これからは毎日孫と一しょに米の飯を食ふのも勝手だった。日頃好物の塩鱒を俵で取るのも亦勝手だった。お住はまだ一生のうちこの位ほつとした覚えはなかつた。この位ほつとした？——しかし記憶ははつきりと九年前の或夜を呼び起した。あの夜も一息ついたことを云へば、ほとんど今夜に変わらなかつた。あれは現在血をわけた倅の葬式のすんだ夜だった。今夜は？——今夜も一人の孫を産んだ嫁の葬式のすんだばかりだった。

（『芥川龍之介全集』第十卷、二〇三頁）

このように、皮肉にもお住の幸せは家族の絆を失った度ごとに訪れる。お民の死はお住にとって「楽になりたい」という願望を実現させたのみならず、家長の地位への復権のチャンスを与えた。同時にお民との対立が解消することにより、お住のエゴイズムもお民の「家」を守ろうという建前論とのぶつかりを回避し、お民を嫁の手下として表彰しようとする世間にも反発せずに済んだのである。しかし、長い間彼女を悩ませ続けた嫁への憎しみや怒りがなくなり、お住が幸福感を覚えたのも束の間

で、残るのはこれから「一人生恥を曝し」て生きていかなければならない自分自身に対する自責の念であり、孤独である。作品の結びの「お住は四時を聞いた後、やつと疲労した眠りにはひつた。しかしもうその時にはこの一家の茅屋根の空も冷やかに暁を迎へ出してゐた。……」という一文は、やがて迎えるであろう彼女の孤独な晩年を暗示しているように思われる。

## 二

『一塊の土』では、冒頭から最後まで、お民とお住の言い争いが絶えない。二人の争点は二つある。一つは婿取りである。いま一つはいかにして一家の生活を維持するかである。

お民の夫、仁太郎は、八年間の寝たきりの後、死去し、お民は若くして未亡人になった。息子の死後間もなく、お住は嫁に婿取りを勧める。しかし、お民はお住の勧めに応じようとしなない。お住は簡単には諦めず、きっかけを見つけては婿取りの話を持ち出す。度重なるお住の勧めにもかかわらず、お民は首を縦に振ろうとしない。その理由として、彼女は理由を二つ挙げる。一つには、再婚をして家に他人を入れるのは息子が不憫であり、二つには田圃が二分になり、跡取息子の広次に済まないというのである。

姑お住による嫁のお民に対する再三にわたる再婚の勧めを見ると、寡婦の再婚をめぐる日本と中国の社会慣習は大きく異なる。近代以前、農業経営を小家族に頼る日本では、家共同体における労働力を補充するために、寡婦の再婚は不可欠である。これは、明治・大正期のみならず、

近代以前の日本では、広く行われた慣習である。一方、近代までのいわゆる封建時代の中国では、寡婦の生き方は二つある。一つは、婚家の家長の決定により、去就が決まる。場合によっては、家長の意志で売られた形で、再婚させられることもある。魯迅の小説『祝福』<sup>(註)</sup>は、そのような寡婦祥林嫂の再婚を描いている。もう一つは、いわゆる「貞婦」、二夫にまみえず」という言葉に現されるように、死んだ夫のために節を守り、一生独身を通すことである。これは儒教の道德観によって最も奨励されるものであり、節婦を表彰する石碑や道德書がいまでも数多く現存する。よって、お住のように姑みずから息子の未亡人に再婚を勧めることは、中国では普通の場合考えられない。まして、親戚が寡婦の再婚を促すようなことはなおさら稀である。中国では、普通寡婦の運命は、婚家の経済的利益のために売られるか、又は婚家の体面のために節を守ることを強要されるかのどちらかである。日本では、江戸時代に朱子学の影響を大きく受け、明治期に入ってから儒教道德が天皇制の家父長的統治の形成のために利用され、強化されたが、『一塊の土』を見ると、儒教道德、少なくとも家族倫理の部分は、あくまで理想的な倫理観に止まり、社会の現実とは合致していないように思われる。

婿取りの話をめぐるお住とお民の意見のすれ違いは、単なる再婚の問題ではなく、家のあり方に対する認識の差によるものであると考えられる。お住は世間体を気にするほか、「家」には男手が不可欠だという従来の既成観念から抜けられず、婿を取ることによって家を維持していることとする旧来の慣習にこだわる。お住が何度も婿取りの話を持ち出すのは、その都度きっかけがあり、理由も異なるが、彼女の意識の中に旧来

の慣習に従おうとする気持ちが強かったゆえだと考えられるのではなからうか。

一方、お民は、お住が相手に選んだ仁太郎の従弟与吉に対して、全く興味を示さない。彼女は、与吉がお住にとっては親戚であるが、自分には他人であり、気兼ねしなくてはならないこと、また、今さらこの家に他人を入れたら、現在の畑を二分にしなればならず、跡取り息子の広次に済まない、などを理由に挙げる。しかし、もっともらしく聞こえるこれらの口実は、実際にはお住を納得させるためだけのものであり、彼女の本音とは思われない。与吉はお住たちの話題にのぼるだけで作品中には登場しない人物であるが、作者は一つだけ彼に関する重要な情報を与えてくれている。それは、与吉が「この頃ぢや、ばったり博奕を打たなえと云ふぢやあ」、つまり嘗ては相当な博打好きであったことを匂わせているのである。博打がのめり込みやすく止めにくい悪習であることは、洋の東西を問わず、人類一般に共通する事実のようである。例えば、魯迅の『阿Q正伝』の主人公阿Qも、博打好きである。彼はお金が必要なきときには、臨時雇いとして働くが、真面目に農作業をして一家を養うことをしない。与吉が「この頃」博打を打たないといっても、今後この悪習に手を染めず、まじめに働いてくれるかどうかはわからない。お民はかつてかなりの博打好きであったらしい与吉に対して、強い不信感を持っているのではないかと考えられるのである。

また、共同体を構成する最小の単位である「家」のあり方について、お民は一家には男が不可欠だとする旧式の考え方に捕われているお住と違い、かならずしも「家」に男の存在が必要だとは考えていない。八年

間寝たきりの夫を抱えていた彼女にとっては、自分自身の力こそが絶対的な信頼を置けるものであり、男に頼って生きていくことの頼りなさを身にしみて感じている。

お民は家に男を入れない代わりに、自分がある意味「男」になって猛烈に働きつづけ、家の事業を拡大しようとした。平岡敏夫は『一塊の土』のテキスト分析の中で各節の冒頭の一文を抜き、比較した上で次のように指摘している。

気づくことは、①と⑦、つまり、はじめと結びを除いて、すべて「……つづけた。」とある点で、これだけでも芥川の意識的な方法が見てとれる。⑤だけはお住についてであるが、②③④⑥はすべて、「お民は」となっている。この「……つづけた。」は、労働の継続をあらわすというだけでなく、②から③へ、③から④へ、というふうな、労働の継続が加算されていくのであり、農民の果てしない労働とくにお民という農婦のそれを、効果的に訴える方法となっている。そして、たんに訴えの強化というだけでなくお民の労働の継続という事実、それにとまなうお住の労苦の継続という事実をも語っているはずである。

（『芥川龍之介 抒情の美学』三七三頁、大修館書店、昭和五十七年十一月）

お民は始終家のために働かざるを得ず、またそういう人生をみずから

選び取った女性である。彼女自身の個人の幸福は何だったのであろうか。作品を素直に読むかぎり、普通の女性として、又は妻、母親として感ずるはずの喜びは、彼女の中には感じられない。本作は、本来妻にとって人生最悪の悲劇であるべき夫仁太郎の死から始まっているが、その夫が八年間も寝たきりであったというのであるから、彼女たち若夫婦の生活は、想像以上に過酷なものであったに違いない。夫の死後、毎日農作業に追われるお民は、姑との会話も少ない。同時に、母親としての育児の喜びも彼女にはない。短編小説である本作には、広次少年が四回登場するが、彼女が息子と遊ぶ場面は一度もない。お民の幸福は、一般的に女性がその地位にあること自体を誇らしく思う「妻」や「母」といった社会的位置づけに満足することではなく、社会に出て男並みに働くことであり、「渡りもの」の「稼ぎ病」と否定的観念で名付けられたものである。「渡りもの」の娘である彼女は、自分の力に強い自信を持ち、生産労働やその収穫に喜びを感じているが、芥川が強調しているような、「渡りもの」の「遺伝の力」の本能によって、生まれながらにして金儲けを生き甲斐とする金の亡者ではない。彼女が働かなければならないのは、社会福祉のいまだ整っていない時代の厳しい社会状況と、老人や乳呑児を抱えている女所帯の現実という二重の必要に迫られ、やむを得ぬことである。このようなお民の働きぶりを「遺伝の力」で片づけてしまふのは、社会低層で生活苦に喘ぎながら精一杯生きていこうとする庶民の生活を知らぬ芥川の、知識人としての無知と傲慢であると言わざるを得ない。このことも関口安義氏が「この小説が社会的広がりを持ちえない（『芥川龍之介 実像と虚像』前出）と、批判した故である。



先に述べたように、お民が再婚を拒むのは、田地、息子のためといった建前の部分と、与吉を信頼しない、もしくはその必要を感じない本音の部分があると考えられる。彼女が猛烈に働くのは、金を貯めて将来幸せに暮らすためである。つまり、彼女の行動はすべて自分自身の意志で行われるもので、他人によって強要されるものではなく、儒教道徳に従った結果でもない。妻として母としての女性の幸福追求よりも、男性的な社会的立場に身を置くことによって個人の幸福感を満たそうとしたお民は、いつの間にか「嫁の手本」や「貞女の鑑」に祭り上げられ、近所の小学校の修身の時間に「偉い人」として宣伝されるようになる。彼女が死んだ後の記述を引用してみる。

お民の葬式の日には雨降りだった。しかし村のものは村長を始め、一人も残らず会葬した。会葬したものは又一人も残らず若死したお民を惜しんだり、大事の稼ぎ人を失った広次やお住を憐れんだりした。殊に村の総代役は郡でも近近にお民の勤労を表彰する筈だったと云ふことを話した。〔芥川龍之介全集〕第十卷、二〇二頁

彼女は共同体社会が良しとする理想的女性像を喧伝するために利用されるが、社会がお民の人生に見ようとした「嫁の手本」「貞女の鑑」といった儒教的な女性観は、実際のお民の生きざまからは程遠い幻想に過ぎない。お民は女性として家庭の中に奉仕することよりも、家の外の世界に出て社会的労働に携わる、男性的な生活に従事することにより、逆説的にも貞女として称賛の対象となった訳である。これは、明らかに勝手

に彼女を利用する社会の偽善に対する作者の皮肉である。しかし、残念ながら芥川は、「貞女」や「烈女」などを祭り上げる社会の偽善の本質を認識しながら、それを皮肉るに止まり、祭り上げられたことにより、当の「貞女」らが実生活においていかに道徳や倫理に縛られ、精神的苦しみに耐えていくかの現実を批判しようとしなない。これは芥川の限界と言わざるを得ない。

## 結 び

『一塊の土』を写実小説として読もうとすると、当時の農村共同体社会の実態に合わない部分が多く、様々な破綻が見受けられる。例えば、お住とお民の家事従事や労働従事の完全分業は、未だ工業化が進んでいなかった当時の日本の農村社会では不可能である。また、小学校に通うほど大きな農家の跡取息子が家の手伝いを全くしないことは、甚だ奇異に思われる。さらに、たとえ寝食を惜しんで働いたとしても、女手一つで一家三人を養った上に、三千円もの大金を貯めることが現実的に可能なのか疑わしい。

『一塊の土』は、農民の現実生活を反映しようとした小説で、それまでの書齋で知識を獲得できた知的小説の題材と異なり、作家として新しい分野への開拓を企図した意欲的作品である。その意味では評価されるべきであるが、写実小説としては、厳密に言えば不完全な作品である。なぜならば、都会人である芥川が、農村社会という未知の世界を素材に選んだため、おのずと知識の限界を露呈してしまっているからである。

とはいえ、この作品は、弱者よりの立場、もしくはエゴの被害者に寄り添う立場を取った芥川の初期作品と一貫した思想で貫かれている。

同じ屋根の下で寝起きしていながらも、お住とお民は、お互いにエゴを隠し、自分自身をさらけ出そうとしない。故に、作品中でお民とお住の気持ちは終始すれ違えばかりである。互いに家を守ることを目的としながら、異なる方法を良しとする姑と嫁のエゴの対立、さらに、既成の社会の枠に囚われない一女性の生き方を、社会の規範にまで高めて祭り上げようとする社会のエゴ、この三者のエゴをそれぞれ見事に描ききったのが『一塊の土』という短編の主題であるといえる。

本稿では、『一塊の土』を手がかりに、近代農村社会における「家」の意識を、二人の女性の異なる考え方を通して考察した。従来の文学的視点に加え、家族的視点を導入することにより、本作の新しい読みを引き出すことも出来たのではないかと思われる。

## 注

(i) 『報知新聞』大正十三年一月十一日「一月の創作(三)」と『時事新報』大正十三年一月十二日「新年号から」を参照。

(ii) 『新潮』合評会(大正十三年二月)を参照。

(iii) 魯迅が一九二〇年発表した短編小説。

(iv) この用語は『芥川龍之介全作品事典』(関口安義、庄司達也編、勉誠出版、平成十二年六月)における長沼氏の執筆した「農民小説として」より引用。以下同。

(v) 三好行雄氏の『一塊の土』をめぐって(三好行雄著作集第三卷『芥川龍之介論』筑摩書房、一九九三年三月)を参照。

(vi) 例えば『曾我物語』(巻一)の「女ばう曾我へうつる事」など、その一例である。

(vii) 魯迅が一九二四年に発表した中編小説。作品において魯迅は二度も夫に先立たれた農婦祥林嫂の悲惨な一生を描いた。

## その他の参考文献

- ① 『作品論 芥川龍之介』海老井英次、宮坂寛編 双文社出版 平成二年十二月
- ② 『芥川論究』佐古純一郎 朝文社 平成三年八月
- ③ 「純潔——『藪の中』をめぐりて——」瀧井孝作 『改造』昭和二十六年一月
- ④ 「芥川龍之介『一塊の土』モデル論」石井茂 『日本文学』昭和五十五年十一月
- ⑤ 『芥川龍之介研究資料集成』第三卷 関口安義編 日本図書センター 平成五年
- ⑥ 『芥川龍之介研究』吉田精一編 筑摩書房 昭和三十三年六月